

くの如きものを本書に求めてはならない。むしろ著者は、各時代の代表的な修史家の歴史敘述をば史料として、「史的思想といふ」「視角から、人間の思想生活・文化生産の行動を眺め、そこに、人間の具體的な一斷面を掴まうと」されるのである。それ故、これは、歴史思想にアインシュテルンクをおいた一種の思想史・文化史に他ならない。「史的思想の具體的・全體的なる了解」、「人間生の一面としての歴史の歴史」——これこそ、著者の「目指」さるる「念願」なのである。

尚、附録として收められた、「アウグスティヌスの羅馬史論」及び「モンテスキュウの羅馬史論」の二篇は、既に先年諸雜誌に發表されたものであるが、前者は「本書本文の前編とも伏線とも謂ふべき性質を帯びる故に」、また後者は「本文を結ぶと共に、後續史學展開への連繫を暗示する性質を帯びる故に」、敢へて「併せ收録」されたものであつて、共に本書の價值を増すものであらう。

最後に、此の見事に彫琢された「史學史序説」を通讀する幸ひを得たわれわれは、「著者の關心の」「中心」をなすと云ふ第十八・九世紀史學史の公刊される日が一日も近きことを望む念を禁じえないものである。(東京、三省堂刊行、定價四圓)(中山治一)

OCLIO, introduction aux études historiques.

T. VI. Le XVI^e siècle, par H. Sée et A.

Rebillon. Paris. 1934.

『學術研究に於ける専門分化は、指導的理念と基礎的事實とを失はざる限りは、一の進歩である』だが『リセ(Lyce)のドグマテ

イクな解釋と、大學での批判的な研究との距離は日々に著しくなりつつある』

『若き學生が混亂せる刊行物の氾濫や史料の大洋の中にさまよふ時』其處になにかよき指導がなされねばならない。歴史研究はアヴァンチュール(aventure)の性格を擔ふべきものであつてはならぬ。

かゝる過渡期に必要なものは單なるTextbookの類や所謂Histoire généraleと呼ばれる概説書ではない。むしろHistoire intégraleな性質のHandbuchもしくはCompanions to studiesであるべきであらう。

以上が簡勁な序言の中でCharley氏が述べてゐるこの叢書Clioの意圖である。

フランスにも從來すぐれた概説書がないのではない。L'aviséやRimbaud, Glotzの名と共に記憶せられてよい概説的叢書や、多數の卓越せる學者の參與せるL'évolution de l'humanité乃至はPeuples et Civilisationsの如きものをあげることは出来る。だがこれは決して充分な意味でHandbuch的な性質のものではない。それはすぐれた著作であつても便利な手引書ではない。Clioはその後者への試圖である。従つてこれは特異な構成を有してゐる。その第六卷、「第十六世紀」を例にごく簡単に紹介しよう。その持つ意味よりして三つの部分に分けうる。

(一) 項目別による概説的描述——中世と近世との時代區分の問題がどうであらうと十六世紀のもつ重要性は無視することは出

來ない、との見解のもとに著者は「地理上の大發見」「經濟的諸變動」「文藝復興」「宗教改革」——個人主義の進歩の諸相——に全二十章のうち前八章をあててゐる。次でフランス・スペイン・英國等の近代諸國家の成立過程、イタリヤ戰役・宗教戰爭・低地地方の反亂等西歐列強間の諸關係、更に同時期のスカンデナヴィア地方・ポーランド・ロシアより進んで僅か九頁に東洋文明の概觀をも大膽に試みてゐる。

勿論敘述は非常に簡潔である。事實は必ずしも年代的に、順序づけられてはゐない。従つてそこには若干の缺點も亦含まれてゐる。項目細別のために動もすれば事象の羅列に流れ易く相互の關係、或は發展的把握に不十分な所がないでもない。しかしこれらの點は本書の性質上やむをえないことは著者自ら序文の中に認めてをり、卷末の索引はこの缺を幾分なりとも補うものであらう。

(二) 參考書誌 (Bibliographies)——「手引書」として重要なこの部分は卷初の *Bibliographie générale* 以外に各章末の *Sources* 及び *Bibliographie* より成つてゐる。必要な史料及び短い批評と註釋とを附せられた參考書目は本來の歴史研究への第一歩を踏み出さしめるものである。

ここには従つて數多くの著書、論文等が極めて最近のものに到るまで提示せられてゐる。「歴史の過剰」を感じるかもしれない。だが「歴史の世紀」の名著、特に獨、英の古典的著述で略せられてゐるのは、單なる國民主義的傾向、或は著者の不注意とのみ斷じざるこの出來ぬものがある。十六世紀に關する *Ranke*, *Froude*

等の著述の省略は (iii) の性質を明確に限定するものと考へられる。

(iii) 問題の現狀 (*état actuel des questions*)——この叢書の本質を最も特徴的に示し、且つ價值づけてゐるものは、*Bibliographie* に續くこの部分である。取上げられた主題に關する最近の論究の狀態を知ることが、歴史研究の第二步とでも云ひうるであらう。「手引書」のもつ役割の大部分はここに存してゐる。獨逸の史風に常にみられる如き論爭紹介的研究をとることの少ないフランス史學にあつては、このやうな部分は、それ自體可成高く評價せられてよいものと思はれる。むろんこれらは未だ決して充分なものではない。殊に第三章 *Humanisme et Renaissance* に於けるものは、獨逸のそれに比すれば、著しく見劣りがするであらう。だが第二章の「資本主義の起源」或は第四章の「宗教改革の起源」等のこの部分は、本書の中でも出色のものであらう。

如上の構成の中にこの叢書の特徴の、その優れた面と劣つた面とが適確に推知される。其の概説的敘述の部分・參考書誌より古典的著述の脫落・論爭の現狀の紹介等は、この叢書が決して所謂「概説」ではなく、あくまで「研究の友」(*Companions to studies*)であり、それ以上のものでないことを示してゐる。専門的研究へ向はんとする人々、乃至は一般的な文化的教養ある人々の段階に於て、この叢書は最もよくその使命を果しうるものであらうと信ずる。

尙此の叢書中既刊の分は *Vol. II. La Grèce, par R. Cohen* ;

Vol. IV. Le monde féodal, par J. Calmette; vol. V. L'abolition du monde moderne, par J. Calmette; Vol. VI. Le XVII^e siècle. (前川貞次郎)

○太平洋を繞る國々

小野鐵二 共著
別技篤彦

現時の緊迫した國際情勢は先づ我々をしてこの世界的危機に登場して來る諸國の事情に就いて認識する必要を感じしめる。而して我等の關心の一半が太平洋にあることは言ふまでもない。さうした意味に於て小野教授・別技文學士の共著になる「太平洋を繞る國々」は極めて大きな意義を持つものと考へられる。

敘述は前篇と後篇に分かれたれ、前篇に於ては先づ太平洋が世界史の舞臺に登場してくる過程から始まつてその自然と人、交通、精神文化、國際關係の展望の順序で述べられてゐる。後篇に於ては太平洋を繞る國々の現状が明かにされて居り、各國に就いてその自然、人種、歴史から政治狀態、經濟事情に至る迄極めて要領よく簡単に纏められてゐる。

本書の特色の一としてはそれが極めてすら／＼と且興味深く書かれてゐて非常に読み易いことが擧げられる。筆者も亦本書に引きずられて一氣に最後まで讀んだ一人である。殊に無味乾燥であるべき統計が文章の中に組入れられ乍ら、少しもさうした感じを抱かせられない。

本書が極めて解り易く、且要領よく纏められてゐることは太平

洋及びそれを繞る國々に就いての常識を一般人に與へると云ふ本書の目的を充分に達せしめてゐる。日本の軍縮脱退と共に世界各國の關心は太平洋に集まつてゐる。この際我々日本人が太平洋を繞る國々の現状を知つて置くことは最も必要であらう。その意味に於て本書は専門家にのみでなく、又一般の人々にも趣味と實益を兼ねたものとして推賞出來る。(四六版七一四頁、定價參圓八拾錢 章華社發行) (安藤)

○考古學論叢 (第一輯)

考古學研究會

考古學の分野に於ける熾烈なる研究者によつて守り育てらるべき専門雜誌としてあらはれた本論叢は、その題簽を濱田先生より與へられ、そしてその發展性を將來に持つものとしての感を深からしめる。今第一輯の内容を示して來るべき第二輯以下の内容の發展を期待する。

内 容

- 一、美術史と考古學 長廣 敏雄
 - 二、西南日本繩文土器の研究 三森 定男
 - 三、廢光明山寺の研究 角田 文衛
 - 四、古代支那動物模様特に三代古銅器模様の溯源とその意義 中村 清兄
 - 五、ニコルスキー「先史學方法論」 福津正志譯
- (季刊、菊版一五〇頁、年金參圓)